

群馬県立文書館 新規公開文書展2021
加藤史夫家文書（請求番号P1706）



沼田藩主土岐家の家臣だったお宅の文書群です。

伝存の経緯は不明ですが、甲州流兵学師範でもあった片岡家（片氏之図書印）や、国文学者でもあった伊藤光中の関係書籍（絡石舎文庫印）など、複数の沼田藩士の家蔵資料も含まれています。

文書群全体の特色は、兵学や礼法、海防に関する文書・絵図、また、国文学・国学の書籍（本居宣長など）が多くあることです。

当時の武士が伝統的な文武の教養を身につけていた様子がよくわかります。また、異国船来航による緊迫した状況下では、幕府の命令（軍役）で海防の業務に取り組んでいたことがわかる文書もあります。

計880点公開。

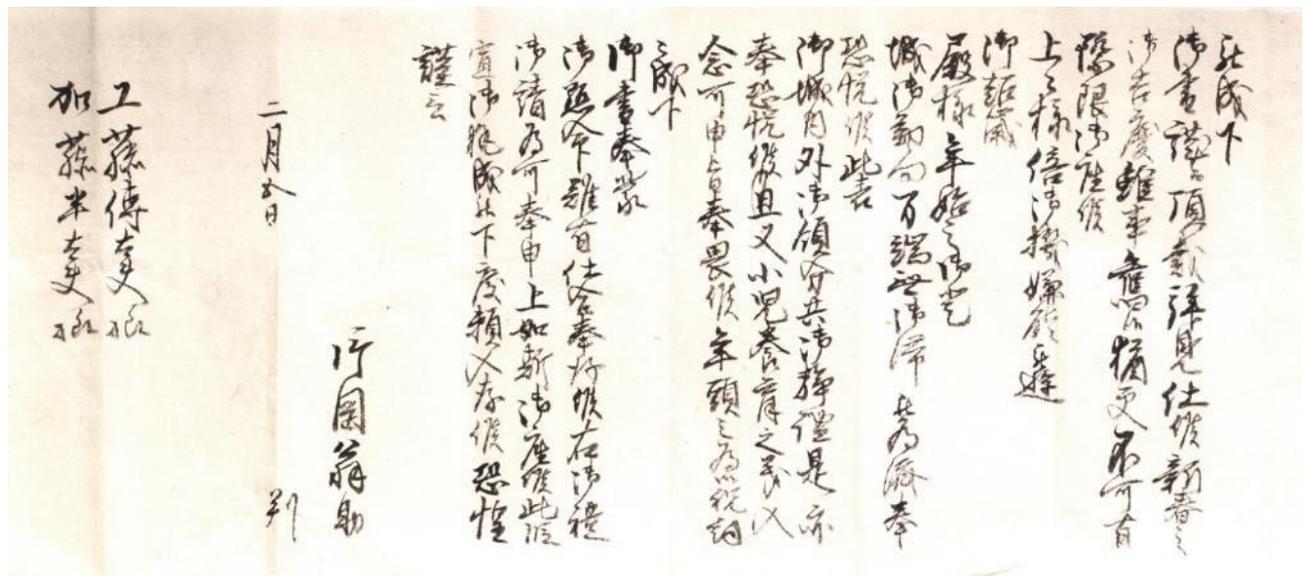
	表題等	年代	作成者→宛先	形態・数量	文書番号等
1	〔御直書御請案〕(年始、小児養育之義入念可申旨奉畏候)	文政8 (1825)年	片岡翁助 → 工藤伝太夫、 加藤半太夫	折1通	加藤家 491-6
	見どころは、沼田藩領において、「小児養育」(養育手当の支給など)を「入念」に行うべきだ、という藩主の指示が書かれている点です。				

沼田藩の家老、片岡翁助（安承）が加藤半太夫らに出した文書の案文です。藩主・土岐頼潤（よりみつ）から年始の書状（直書）を頂戴したことへの御礼が記されています。

特色は、「小児養育」を「入念」に行うべきだ、という藩主の指示が書かれている点です。江戸時代の後半は全国的に、農村の働き手の減少と少子化が深刻になり、領主の財政状況が悪化しました。上野国（現在の群馬県）において、沼田藩の少子化対策（養育手当の支給、間引きの禁止など）は早かったといわれていますが、そ

の理由として、天明3（1783）年の浅間山の噴火、以後の飢饉等で大きな打撃を受けたことが考えられます。

なお、加藤半太夫（規寧）は「家中由緒書」によれば当時39歳で、高53俵3人扶持、古武道の堤宝山流和合の免許などを持っていました。当文書群には、幕末維新期の「加藤恰」が藩から堤宝山流和合の世話人に任命された文書があります（文書番号523）。



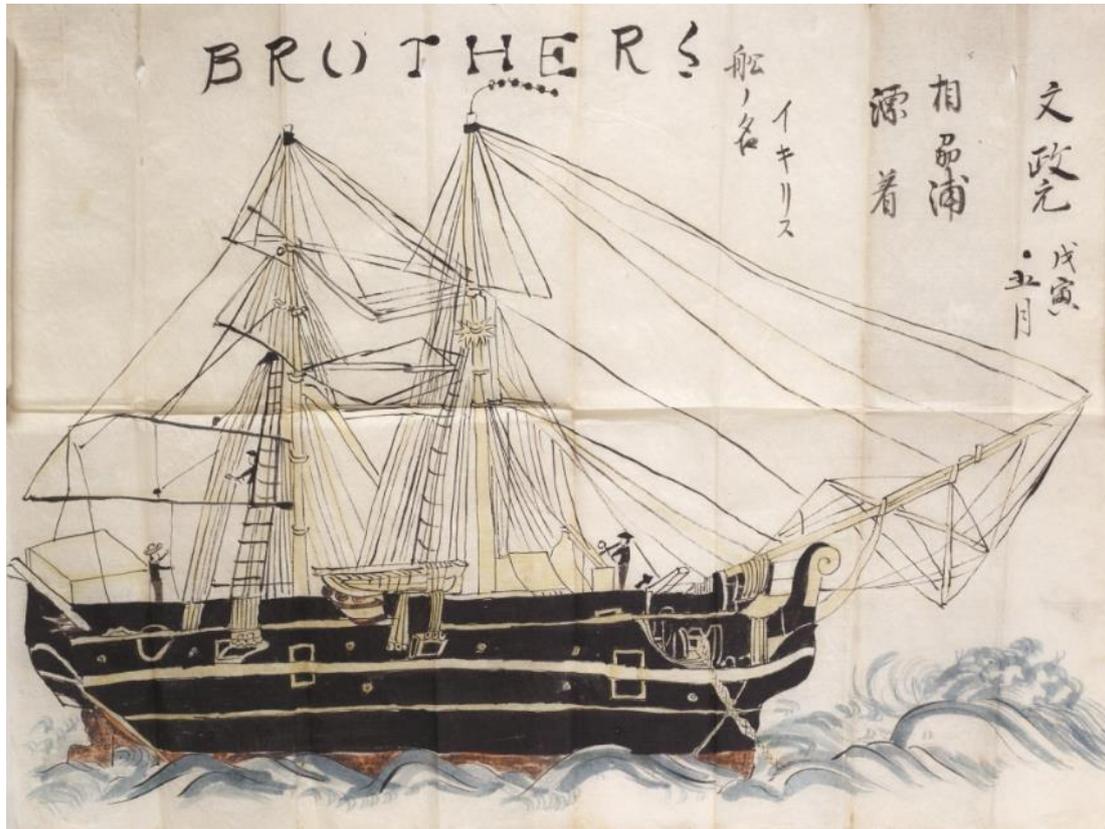
御書成し下され謹みて頂戴、拝見 仕り候、新春の御吉慶、事旧候と雖も猶更、際限有るべからず御座候、上々様 倍 御機嫌能く、御超歳遊ばされ、殿様年始の御登城御勤め向き、万端御滞り無く済ませられ、恐悦奉り候、此の表、御城内外・御領分とも御静謐、是亦恐悦奉り候、且又小児養育の義、入念申すべき旨、畏み奉り候、年頭の御祝詞として、御書成し下され、御懸命蒙り奉り、有難き仕合せに存じ奉り候、右御礼御請け申し上げ奉るべき為、斯くのごとく御座候、此の段宜しく御執り成し下され度、頼み入り存じ候、恐惶謹言

二月五日

片岡翁助 判

工藤伝太夫様
加藤半太夫様

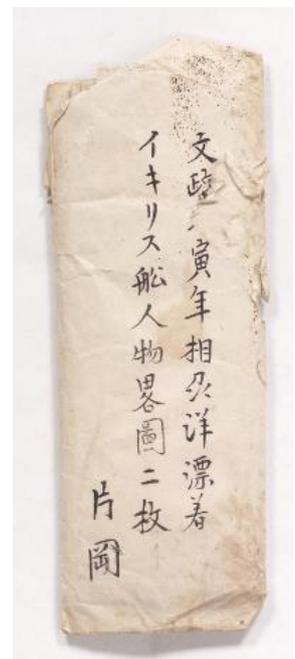
2	〔絵図〕(相州浦漂着イギリス船ノ名 BROTHERS) *縦 28.0cm×横 36.5cm	文政元 (1818)年	(片岡)	絵図 1 鋪	加藤家 816-1
	アメリカのペリー来航より35年も前に相州(相模国)に現れたイギリス船が描かれています。黒い船の上には「BROTHERS」という船名が記されています。				



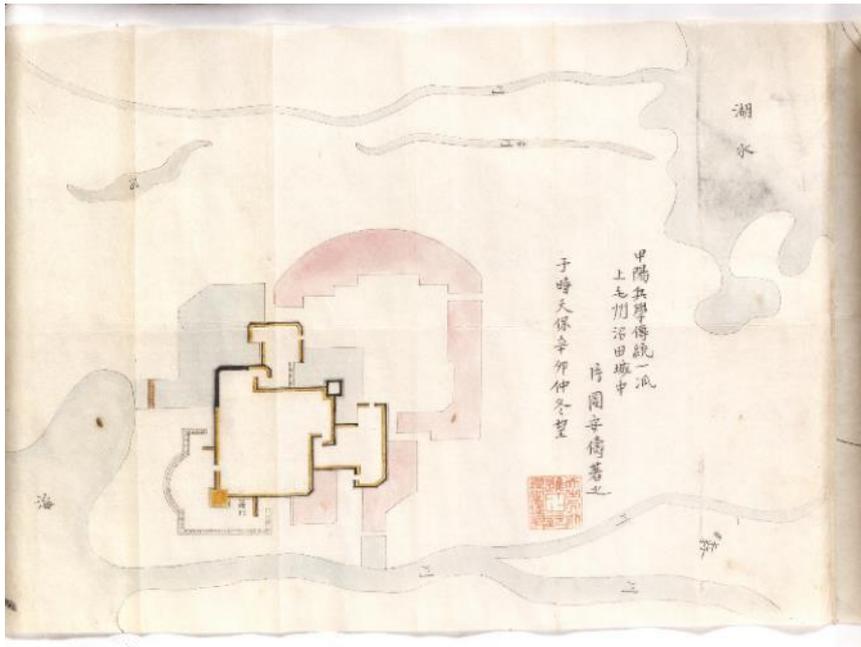
文政元（1818）年に相模国の海岸（現・神奈川県）へ現れたイギリス船を描いています。幕末のペリーの来航がよく知られていますが、それ以前にも欧米列強の来航がありました。

本絵図では、船の絵の上に「BROTHERS」（ブラザーズ号）と船名が英語で書き込まれています。「漂着」と記されていますが、実際にはイギリス海軍将校のゴルドンが幕府との通商を求めて訪れたようです。

包紙には「片岡」と記されています。当文書群の特色の1つは、嘉永期に海防に携わった片岡家が業務で用いたと思われる資料が約20点あることです。この絵図は文政期の異国船来航を描いていますが、片岡家が後年の海防の業務で用いた資料かもしれません。

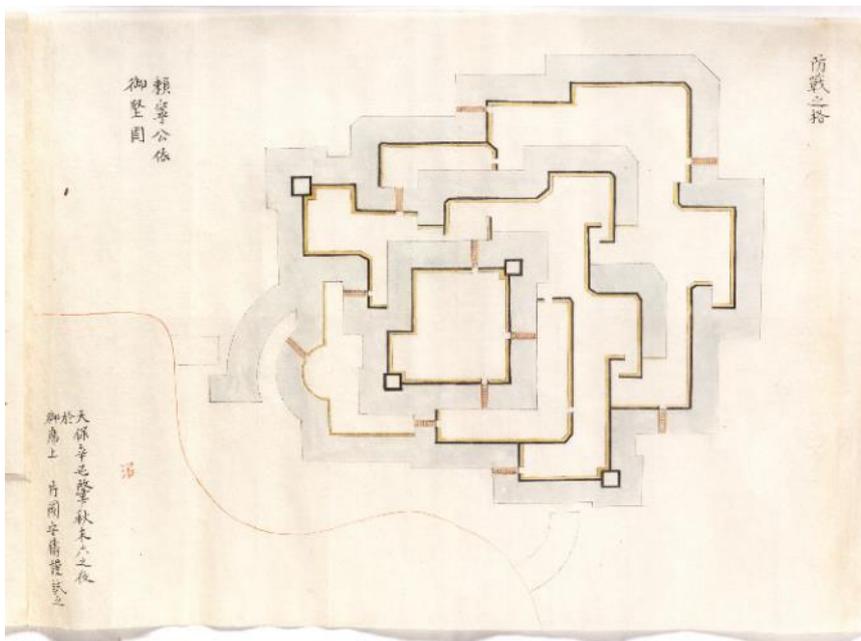


3	代々縄張(籠城之格、18城) *縦 27.5cm×横 693.5cm	安永7(1778)年 ～天保11 (1840)年	片岡安儔、 ほか	継 1 卷	加藤家 428
	沼田藩の甲州流兵学の師範が描いた城絵図です。横に「甲陽兵学伝統一派 上毛州沼田城中 片岡安儔」と署名しています。				



当文書群の特色の1つは沼田藩士が学んでいた兵学、特に甲州流兵学の資料が多くあることです。そのうちの1つが、城の縄張り（設計）を描いた絵図です。

上の絵図（天保年間）には「甲陽兵学伝統一派 上毛州沼田城中 片岡安儔」と署名されています。片岡家は沼田藩の甲州流兵学師範を務めていました（資料1の家老・片岡翁助安承もその一人です）。



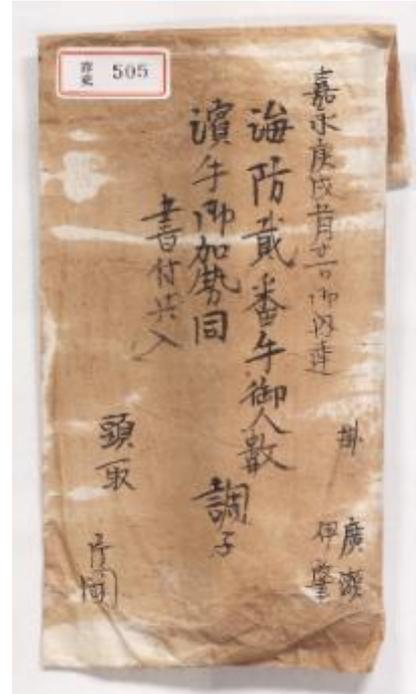
下の絵図（防戦之格、天保年間）には「頼寧公依（より）御堅固」とあり、片岡安儔の城絵図を上覧した藩主の褒め言葉が記されています。

4	伺候覚 (海防二番手人数割につき、浜手御加勢、夷賊海防につき)	[嘉永3 (1850)年]		切継 1 通	加藤家 505-3
異国船の頻繁な来航に際し、沼田藩が担当する湾岸警備について、さまざまな意見(後半は主に経費削減案)が箇条書きされています。					

嘉永期の海防（湾岸警備）の業務に関する資料があることも、当文書群の特色の1つです。

袋（右）には年代のほか、「海防」「浜手御加勢」「頭取 片岡」といった語句があり、嘉永3（1850）年の主担当が片岡氏であったことがわかります。

資料4はこの袋の中の1通で、後半には沼田藩領から派遣する際の経費削減プランが事細かに書かれています。興味深いので一部をご紹介します。



- ・在町（沼田町）の馬を徴発しても仕込めなければ「害」になるだけであり、数の点でも江戸の沼田藩厩の馬で足りる。
- ・鉄砲組は専ら（沼田藩領の）猟師を交えるが、鉄砲は駄荷で送り、猟師は道中、荷物運び、陣中では日用人足として使う。
- ・弓・長柄は海防には無用なので、組の者は略し、陣中警固の際に飾る（「夷賊」が万一上陸した時は使うかもしれない）。

[そのほか]

- ・江戸から出発する一番手の人数割がわからないので、取りかかれない。
- ・「浜手御加勢」については先年、清水半九郎が報告したので、それをもとに準備すればよい。

海防業務を任された沼田藩の様子がわかり、興味深い資料の1つです。

なお、文中の清水半九郎（長盈）は片岡家の出身で、藩主に甲州流兵学を進講したこともあり、その子（中村尚重）は嘉永・万延の頃、甲州流兵学師範（片岡家）の後見でした。

伺々覺

一 御勤めの調子にて足り御座候や、

御上 御出馬の

思し召しに御座候や、

方大いに相違仕り候

江戸表より差し出され候

未だ拜見仕らず候えども、粗承知仕り候には

公儀御定め御軍役よりは余程御人数

多くにも御座候やの由、之れにより御定め御軍役に

拘らず、海防一色に調子を取り申すべきや、一番手と

式番手は合し候儀に御座候間、一番手の御人数割拜見の上に之れ無く候ては、調子を取り

出来兼ね申し候間、拜見仕り度御座候

騎馬の分も海防のみの事故、役騎馬

の分計り、其余りは途中も歩行立の由、粗

承知仕り候、馬数余り計り相成り候ては、口取りも相

増し、都て粮積等余程の相違に相成り申候、

左候えば、江戸・沼田御厩の御馬にて御間に

合い申すべきや、在町の男馬差し出させ候ても、仕込み候上に

之れ無く候は、却て害之れ有るべきやと存じ奉り候、此の儀

は浜手御加勢迎も同様に御座有るべく候

(後略)

一 御勤めの調子にて足り御座候や、

御上 御出馬の

思し召しに御座候や、

方大いに相違仕り候

江戸表より差し出され候

未だ拜見仕らず候えども、粗承知仕り候には

公儀御定め御軍役よりは余程御人数

多くにも御座候やの由、之れにより御定め御軍役に

拘らず、海防一色に調子を取り申すべきや、一番手と

式番手は合し候儀に御座候間、一番手の御人数割拜見の上に之れ無く候ては、調子を取り

出来兼ね申し候間、拜見仕り度御座候

騎馬の分も海防のみの事故、役騎馬

の分計り、其余りは途中も歩行立の由、粗

承知仕り候、馬数余り計り相成り候ては、口取りも相

増し、都て粮積等余程の相違に相成り申候、

左候えば、江戸・沼田御厩の御馬にて御間に

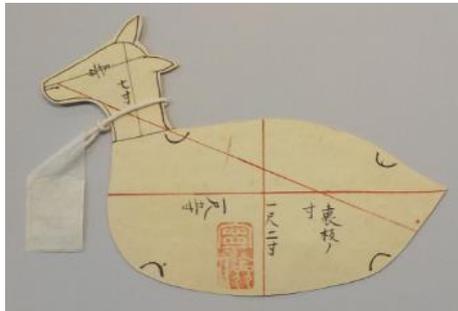
合い申すべきや、在町の男馬差し出させ候ても、仕込み候上に

之れ無く候は、却て害之れ有るべきやと存じ奉り候、此の儀

は浜手御加勢迎も同様に御座有るべく候

(後略)

5	〔雛形〕(草鹿形、的)	(近世)	(渡辺正縄)	1点	加藤家 347
	鹿の形を模した弓術の的の雛形(小型の見本)です。				



一見かわいらしい鹿のグッズに見えますが、胴体の中心には的があり、弓術の的の雛形です。的中と見なされる白円の4寸的のほかに、裏面にはサイズ等が記されています。

当文書群には様々な雛形が約20点あり、中には手形と紙の紐で弾(ゆがけ、弓を引く時につけるグローブ)の紐の結び方を示すものもあります(文書番号350)。

この資料には、包紙にも興味深い点があります。1つは「寧儉」の朱印です。当文書群にはこの印の押された資料が約100点もあり、そのほとんどが武芸や、小笠原流礼法をはじめとする礼法の資料です。

2つめは「渡辺正縄」という署名です。当文書群にはこの人物が作成したり、その可能性のある文書が数10点に上ります。正縄は「家中由緒書」によると、家老・渡辺左門の嫡子で、武芸掛(係)などを勤め、嘉永元(1848)年に43歳で亡くなりました。